

本ばかりだつた。そして其處の主人は頻に何か原稿を書いて居た。友人が彼是書籍を選択してるとき、主人が、筆を投じて出て来た、頻に友人の選擇に助言する。此の本はケンブリッジ大學教授で學者ではあるがハートの無い書き方だとか、之れはダブリン大學のクロフロードと云ふ學者で最も正確な最も事實に忠實な、新しい實驗であるとか、之れはオリバー・ロッヂの意見を全然否認してゐる本だとか、之れはオリバー・ロッヂの本に反對した著書を書きながら、後に事實の正確なることを認めて改宗した本だとか、盛に説明する。大學かなどを卒業して本屋になつた人らしい。流石エヂンバラは學者町だと思はれ、またスピリチュアリズムに就いてのみこんな澤山の著書があるもの

かと驚いた。そして友人は旅行中スピリチュアリズムの本のみ耽讀してゐて、はては自分は一體駄目なんだが、君は甘く行きさうの性格だから遣つて見ろ、そう云つてプランセットなどを買つて、自分にプランセットに手を載せさせたりした。無論駄目だつたが友人が頻にスピリチュアリズムの話をするので、それ程スピリチュアリズムが廣く世界に傳播してゐるものかを疑つた。後倫敦に歸つて倫敦駐在の正金銀行重役の巽氏と晚餐を共にして、之れが亦話題に上つたが、巽氏も中々にスピリチュアリズム通なるを知り、銀行家の間迄にも廣がつてるのかと驚いた。大陸へゐつてからも、各國の本屋を覗いて歩いたが、佛蘭西の著書も可なりあるらしい。それから倫敦を出發して紐育に赴く際に汽船中

の讀物にと思つて色々雑誌を買つたが、其中に Fortnightly Review の十二月號がありそれに Thought and Religion; Forty Years Controversy と題した、Owen と云ふ人の論文があり、之れはスピリチュアリズムと基督教との關係を論じたものであつた、元來教會の僧侶連は新しい運動にはいつも反對する傾向があるから、珍しくはないにしても、此頃のスピリチュアリズムに對しても惡魔の靈であると反對してゐる人もあるそらだ、しかし此の人は牧師でありながらスピリチュアリズムを認め、戦前には教會に盛なる運動もあつたが多くは傳道即ち社會運動の性質を帯びてゐて、甚だ淺薄の憾があつたが、戦後にはスピリチュアリズムの影響を受けて、信徒の祈即ち神との交通と云

ふ點に運動の重點が移つて、大なるムーブメントがあるそんな風に書かれてゐる所を興味を持つて讀んだ。亞米利加はまだ歐洲程ではない、がそれでもメテルリンクが來て、彼の作青鳥が紐育のメトロポリタンで演ぜられた時などは、満場空席なく切符は數倍の高價で賣買され、メテルリンクの神秘主義の講演なども可なり盛況で、屢ば新聞に長い材料を供給し、自分が紐育を出發した直ぐ後、サー・オリバー・ロッヂが渡つて來て、紐育で講演し、其の内容が長い電報となつて桑港の新聞に載せられてゐた。それを讀むと科學者たるロッヂとして自分達の驚くばかりに來世が如實に存在し、吾人が其人達と交感し得ることを力強く大膽に述べてゐた。

英國のギールド・ソーシャリスト、のホブソンなどは貨幣制度の撤廢は唯に經濟上の革命ではなく、實に其前提として精神的の革命を要すと説き、今や多くの學者も在來の經濟學に根本的の疑惑を挾むである、戦後の一大運動たる社會運動と此のスピリチュアリズムは結び付くであらうか、結び付いたらどうなるだらう。(大正九年二月稿)

戦の跡を探る 終

戦の跡を探る

大正九年六月十五日印
大正九年六月十八日發

著者 行 刷

定價壹圓八拾錢

細 貝 正 邦

發行者

東京市神田區錦町一丁目十二番地
伊 東 三 郎

版權
所有

印刷者

東京市神田區今川小路三丁目三番地
三 好 三 郎

發行所

東京市神田區錦町
一丁目十貳番地

自 彊 館 書 店

電話 神田二五三三番
振替口座東京三一四三七番

株式會社 一匡印刷所 印刷



388
296

終

